介護新聞2008年11月20日付

# 花凪屋繁盛記

連載3

## 人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪
木村美和子理事長

### 行動し、実現する場として

「花凪」設立趣意書の内容は「地域や社会において、多様な個性を尊重することを基本とした豊かな人間関係を成立させることにより、自立した生活が送られるように支援すると共に、自分もそのように支援されることを望みます」「『なりたい自分でいる』『なりたい自分になる』ために、待つのではなく、行動して実現する場として設立します」というものでした。

また、「花凪」という名前も私の造語でして「人はみな花であり、それぞれに花を咲かせる場所がある。自然に望む花が咲かせられるような、凪いだ気持ですごせる場所にしたい」という意味を込めました。

そのような場所をつくりたいと強く思い出したのは、今から十年前。二度目の喘息発作で入院中のベッドの上でした。それまで、私の唯一の自慢といえば「病気知らずの丈夫な身体。一晩寝たら、アラ？　元通り」と言うくらい病気とは縁が無く、何の根拠もなく、これからも無病息災の日々を重ねていくものと思っていました。一度目の入院の時ですら、「たまたまなってしまったのね」とお気楽に考えていました。

ところが、不覚にも二度目の発作を起こしてしまいました。この時は、急激に血圧が下がり、チアノーゼが出る（看護師さんの会話が、しっかり耳に入ってきたのです）という状態で、生まれて初めて「私死んでしまうのかな？」と、「死」を意識しました。幸いにも、危機は脱出しましたが、その後二日間は食べられない・話せない・歩けないという状態でした。

病室を出られるようになってからも、車いす全介助、食事もベッド上でとり、下膳も自分ではできないという状態でした。状態が良くなってきても、枕元のバスタオルを自分で取り替えようとしても、「無理をしてはいけません」と看護師さんに優しく制止されます。してはいけないことばかりに取り囲まれていました。そうして、私はベッドの中で、できなくなったことの数を数えていました。

そのうちに、もしかしたら私も介護をしてきたのではないか？　と振り返ることに至りました。「否」とは断言することはできませんでした。この時、「介護する側」「介護される側」の関係は常に固定してはいないのだと言うことと、介護は手をかけすぎて自信をなくさせることではなく、できることを増やすことなのだという当たり前のことに気づかされました。

気づいた途端、私の頭の中は「花凪構想」でいっぱいになりました。細部は違うのですが、基本形は現に行っている活動そのものが、その構想でした。それは私をワクワクさせましたが、同時に発作への不安も強くありました。両方の思いが重なり、設立趣意書の「待つのではなく、行動して実現する場」という文章になりました。

マスターは着物姿。カクテルも売りのバリアフリー居酒屋

### 活動の始まりは「今日だけ酒場」

気負い込んで任意団体を立ち上げ、NPO法人設立認証申請し、活動を始めました。何を始めたかと言えば、今も「花凪」の代名詞ともなっている、バリアフリー居酒屋「今日だけ酒場花凪」です。気負い込んだ割には気の抜ける活動だと思われる向きもあろうかと思いますが、私の中では満を持した活動でした。実は「花凪構想」の中核をなすもので、言うなれば、逆発想です。これも十年前のベッドの上で思いついたものでした。

病状が安定してくると、懐かしくなるのはネオン街。ちょうど、病院の窓からはそれが見えるのでした。窓枠にへばりついて、早く居酒屋に「現役復帰」したいものだと切に願ったのですが、一度目の退院の後飲みに行き、周りに大変心配をかけ、これなら自宅で飲んでいれば良かったということがあったので、「無理かなあ」という思いもありました。

そこで思いついたのが「自分から行くことができないのなら、みんなに来てもらえばいいのだ」ということでした。幸い飲み仲間は同業種が多く、介護士に看護師、保健師、栄養士などなど。これなら「具合悪くなってもへっちゃらさ」のノリで、退院後何度も自宅で「居酒屋」を開きました。飲む時も介護や看護、栄養のプロがいるということはとても心強いものでした。広い世の中、身体に不安を抱えながら私のように、安心して楽しく飲みたい人がいるのではないか？　と、回数を重ねると自分本位の発想から、同好の士のことをおもんばかるような考えも生まれてきました。

「そうだ、花凪でバリアフリー居酒屋を行おう！」

「大きなテーブルを囲んで、小宴会のような雰囲気でお酒を媒介にして会話を楽しもう」

「居酒屋には介護や看護、栄養、保育のプロがいて、高齢者も、障がいのある方も、子育て中のお母さんも安心して楽しめる。そんな場所をつくろう」

「花凪」の活動として、そんないろんな思いを込めた「居酒屋」をスタートとしたことが正解だったと思うのは、ここで生まれた人のつながりが今も続いているからです。